



「アウシュビッツの聖者」コルベ神父と ガヨヴニチェック軍曹

松本 照男

コルベ神父の事跡を見ると、私はいつもささやかな一つの出会いを思いおこし「生」と「死」という大きなテーマにぶちあたる。重いけれど、一度は考えてみる価値があるテーマではないだろうか？

マクシミアン・マリア・コルベ神父(1884~1941)

アウシュビッツ強制収容所で餓死させられたカトリックのコルベ神父のことを知る人は多いだろう。77年前の1941年、第二次世界大戦中の出来事である。

信心深いポーランド家庭で育ったコルベは、少年の頃から通う教会内部の柱に常に聖母マリアの姿を見ていたという。長じてイエズス会付属の学校に通い、成人してからは日本の地に宣教師として赴きカトリック信仰の布教を終生の願いとするようになった。なぜ日本へ？という問いには、若い修道士のときに出会った日本人との対話から日本で布教活動を決めたといわれる。聖母マリアへの愛を中心に、コルベはワルシャワ郊外にフランシスコ会のニエポカラノフ修道院を設立し、日本語も知らないまま長崎へ布教活動に赴いたのは1930年のことであった。1936年に帰国して院長を務め修道院は徐々に軌道にのりはじめ、日本への布教に若い修道士たちが定期的に送られるようになった。1939年9月、第二次世界大戦が勃発、コルベ院長も1941年2月ドイツ軍に逮捕されアウシュビッツ強制収容所に収監された。

フランシシェク・ガヨヴニチェック軍曹(1901~95)

職業軍人のガヨヴニチェックは1939年の開戦時、負傷して捕虜になり、脱走・国外脱出中に逮捕され1940年10月にアウシュビッツに収監された。

1941年7月、強制収容所より囚人が脱走したことへの連帯責任として10名の囚人が見せしめに処

刑されることになり、そのなかにガヨヴニチェックがいた。突然の悲運に嘆き悲しむガヨヴニチェックの代わりになると申し出たのがコルベ神父であった。収容所のドイツ官憲は驚きながらもこの申し出を受け入れ、10名の囚人たちは死の10号ブロック棟で餓死させられた。一方、ガヨヴニチェックはアウシュビッツ、ザクセンハウゼン収容所の地獄を経て生き残り、1995年に94歳で亡くなった。

生き残った苦しみ

カトリック信仰の極致ともいべき隣人愛を表現して殉教したコルベ神父は1982年にポーランド出身のローマ教皇ヨハネ・パウロ2世により聖人(シュヴェンティ)として叙階され、今日では世界中の信者たちから賛美、尊敬の対象となっている。

一方、地獄を生き残ったガヨヴニチェックは戦後のポーランドで生き残った苦しみに耐えていた。1980年代後半、私はフランシスコ会修道院長の紹介で地方都市に隠棲するガヨヴニチェックさんに会うことができた。戦後、氏は妻には再会できたが、子どもたちは空爆で死亡。「なぜ、あの時死なずに生き残ってしまったのか？」との思いに悩まされながらずっと生きてきたと語った。最終的にはコルベ神父の教えと共に生きることで、なんとか今日まで生き残った悩みを抱きながら歩んでくることができたと、か細い声で淡々と語るのが印象的だった。

それは、状況は異なるが、神風特攻隊でエンジン不調や、出撃の順番がこないまま終戦を迎えた特攻員の、亡き友たちへの惜別の思いや苦渋にも似たものがあるといったら言いすぎだろうか？

(まつもと・てるお、ワルシャワ、2018.3)



ポーランド映画祭 2018 in 札幌

会場:札幌プラザ2・5(2階劇場)、日時:2018年4月21日(土)10:30~入場チケット販売・整理券配布、11:30~主催者挨拶、お話し「ポーランド映画の百年」三浦洋北海道情報大学教授、11:45~『二つの冠』2017 ミハウ・コンドラト監督、13:50~『最後の家族』2016 ヤン・P・マトゥシンスキ監督、16:30~『早春』デジタル・リマスター版 1970 イエジー・スコリモフスキ監督

『二つの冠』:「アウシュビッツの聖者」と呼ばれたカトリック司祭マクシミアン・コルベの生涯。その数奇な運命を、記録映像と再現映像を組み合わせたドキュメンタリー手法で映画化。2017年カンヌ映画祭特別上映作品。